

ク リ ー ン エ ア

先日盛岡病院の化学物質過敏症外来を受診した方を対象に受動喫煙に関するアンケート調査を実施しました。その結果について第22回日本アレルギー学会春季臨床大会で報告致しました。ご協力への感謝の気持ちを含めて、この場をお借りしまして要旨をご報告させていただきます。

はじめに

化学物質過敏症 (MCS)は環境中の化学物質曝露に過敏に反応して、多臓器の症状を呈し日常生活に支障をきたしてくる疾患である。多種類の化学物質を含んでいるタバコは大部分の患者が反応する物質の一つである。研究その2では受動喫煙がMCSに与える影響について明らかにする。

対象および方法

H14年12月からH22年3月までに当院化学物質過敏症外来を受診した患者にアンケート用紙を郵送し回答を得た。アンケートは本人の検査結果や診断との関係を明らかにする必要から記名式としたが、個人情報を守秘することを明記し、本研究に参加することに対して全例同意を取った。

アンケート内容

- あなたの喫煙状況
- 同居家族の喫煙状況
- 職場での喫煙状況
- 各種化学物質に曝露された時の反応の強さ
- タバコの曝露が原因で仕事や家庭

生活への影響の有無

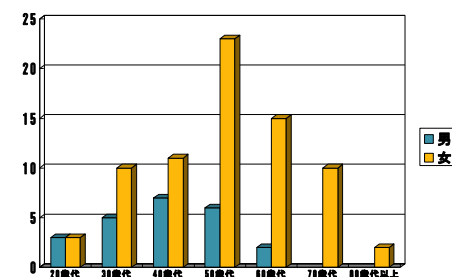
- タバコ曝露による症状
- タバコ曝露に関して周囲の理解、協力の有無
- 全面禁煙にした方が良いと考える場所や交通機関について
- 路上喫煙防止条例や全面禁煙法に関する意見

アンケート回収状況

アンケートを郵送したのはH14年12月からH22年3月までに当院化学物質過敏症外来を受診した患者190名であり、アンケートに同意して回答が得られた者は97名だった。転居先不明あるいは明らかに転居していることが判明したが住所がわからない者が合わせて27名、後に精神疾患と診断された者3名、死亡2名計32名を除外すると対象者は158名となった。以上よりアンケート回収率は61.4%であった。

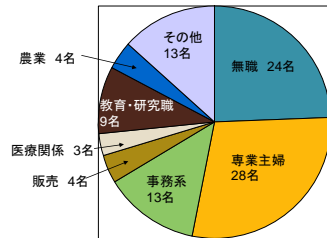
結果

患者背景(年齢別分布)計97名

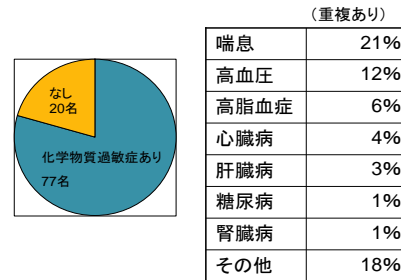


年齢分布では男性は40歳代にピークがあり、女性は50歳代にピークがあった。

職業別

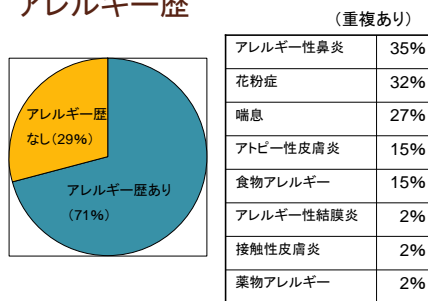


対象患者の化学物質過敏症の診断と合併症 (シックハウス症候群は化学物質過敏症に含む)



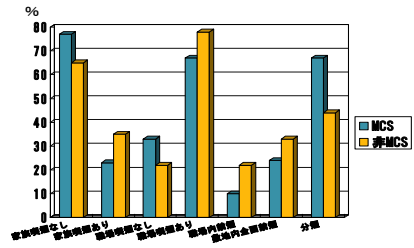
対象者で化学物質過敏症がある者は 77 名 (79.4%) と高率であった。

アレルギー歴



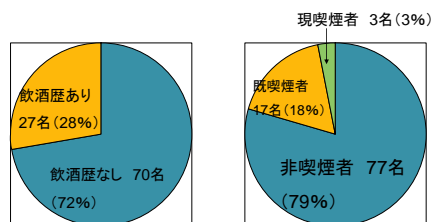
アレルギー歴がある者は 71% に上り、疾患としてはアレルギー性鼻炎、花粉症が約 1/3 に認められた。

化学物質過敏症患者と非化学物質過敏症患者の家族・職場の喫煙状況



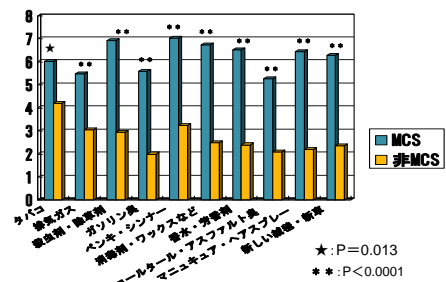
対象者家族・職場野喫煙状況は MCS と非MCS では大差はなかった。

飲酒歴・喫煙歴



対象者の飲酒歴なし、喫煙歴なしは 70% 台と多かった。

化学物質曝露時の反応 (MCS77名、非MCS20名)



対象者のMCSと非MCS間で化学物質曝露時の反応の程度はMCSで有意に反応が強かったがタバコは $p = 0.013$ であったのに対してその他の化学物質に対してはすべて

p < 0.001 でありタバコに対しては両群の差が少なかった。

タバコ曝露による家庭生活や職場への影響 (MCS77名、非MCS20名)

仕事・家庭への影響

	MCS	非MCS
なし	57%	75%
あり	43%	25%
休職	15%	0%
退職	33%	20%
転居	9%	0%
別居	12%	40%

タバコ曝露による症状

	MCS	非MCS
なし	18%	42%
あり	82%	58%
眼や鼻の粘膜症状	67%	45%
頭痛、頭重感	74%	64%
めまい	26%	9%
吐き気	30%	0%
集中力低下	51%	45%
声かすれ、喉の乾燥	41%	27%
皮膚の痛み、痒み	7%	9%
関節の痛み	11%	0%
上下肢のしびれ感	10%	0%
咳	64%	18%
息苦しさ	66%	82%
下痢、腹痛	8%	9%
嘔気	11%	9%

タバコ曝露による家庭生活や職場での影響をみると MCS では 43%に何らかの影響があり影響のあった者では退職を余儀なくされた者が 33%、休職が 15%、別居が 12%と影響は深刻であった。非 MCS では影響のあったものは 25%だった。

化学物質過敏症患者の中でタバコ曝露で症状が起る者の周囲の協力状況(63名)

- 良く協力してくれている 11名 (17%)
- ある程度理解、協力してくれている 30名 (48%)
- 理解、協力は得られていない 13名 (21%)
- 家族は協力してくれるが、職場(家族以外)での理解、協力は得られていない 9名 (14%)
- 家族が禁煙してくれた 8名 (13%)
- 家ではタバコを吸わない 9名 (14%)
- あなたが家にいるときにはタバコを吸わない 4名 (6%)
- 家族が外出から戻った時に更衣、入浴、シャワーを浴びる 10名 (16%)
- 職場内禁煙にした 5名 (8%)
- 敷地内全面禁煙にした 2名 (3%)
- 分煙にした 10名 (16%)

MCS 患者の中でタバコ曝露で症状が起る者が 63名いたが、周囲が良く協力してくれていると回答した者、ある程度協力してくれると回答した者を合わせると 65%になった。

全アンケート回答者の受動喫煙対策への意見 (MCS患者77名、非MCS患者20名計97名)

全面禁煙にした方が良いと考える場所	受動喫煙に対する行政の対応
病院 95%	路上禁煙防止条例の条例化に賛成 100%
学校 87%	路上禁煙防止条例の条例化に反対 0%
役所などの公共施設 82%	全面禁煙法などに対する意見
駅 77%	罰則を伴う全面禁煙法が日本でも施行されることを希望 59%
デパートや大型店舗 61%	全面禁煙法制定には反対 2%
娯楽施設 49%	受動喫煙防止条例が施行される所が増えてくることを希望 67%
ホテル 58%	地方自治体レベルだけでなく国として受動喫煙防止に取り組んでほしい 73%
タクシー 78%	職場での受動喫煙防止の法案の早期実施を希望 50%
列車 91%	喫煙は個人の自由であり、法律や条令で規制するものでない 2%
レストラン 73%	
居酒屋 39%	

MCS、非 MCS を合わせた全回答者に受動喫煙対策について意見を聞いた。全面禁煙にした方が良いと考える場所は多いところから病院 95%、列車 91%、学校 87%、役所などの公共施設 82%、タクシー 78%、駅 77%だった。また路上喫煙防止条例の条例化に賛成は 100%だった。

結論

受動喫煙は MCS 患者に多大な影響を与えていることが確認されたが、化学物質過敏症外来を受診した非 MCS 患者ではタバコ曝露による反応が一番高く、タバコの曝露については MCS、非 MCS で有意差が少なくなっており、他の化学物質曝露よりも影響があることがわかった。

受動喫煙は MCS の発症、重症化、難治化要因となっていることが考えられた。MCS 発症予防には受動喫煙防止について国レベル、地方自治体レベルでの積極的な取り組みが必要である。

謝辞

この度 H21 年度のアレルギー協会の研究助成金をいただきこのような研究を遂行できましたことに深謝致します。解決すべき問題は山積していますが、今後も本研究

で得られた成果を活かして受動喫煙に苦しむ患者のためにさらに研究を進め、アレル

ギー専門家としての立場から社会的提言をしていきたいと考えています。